

「隠されたアンチノミー」とその解決：カントにおける文化の進歩と道徳について

大森, 一三 / OMORI, Ichizo

(発行年 / Year)

2017-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第386号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2017-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(哲学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013934>

法政大学審査学位論文の要約

「隠されたアンチノミー」とその解決
—カントにおける文化の進歩と道徳について—

大森 一三

目次
凡例
初出一覧

序論

- 第1節 本研究の目的
- 第2節 アンチノミー研究の現状と課題
- 第3節 本研究の考察方法
- 第4節 本研究の構成

第1章 批判哲学におけるアンチノミー概念の再検討

- 第1節 アンチノミー概念の多義性
- 第2節 『純粹理性批判』および『実践理性批判』弁証論のアンチノミー
- 第3節 『判断力批判』におけるアンチノミーの定式の変容
- 第4節 三批判書以外のアンチノミーに対する解釈

第2章 文化と道德とのアンチノミー

- 第1節 「隠されたアンチノミー」の定式化を巡って
- 第2節 「文化」概念に関連する先行研究の問題
- 第3節 最終目的と究極目的を導出する論理の異質性
- 第4節 文化に対するカントの両義的評価
- 第5節 文化と道德とのアンチノミー

第3章 教育における「自由と強制とのアンチノミー」

- 第1節 教育思想における「隠されたアンチノミー」
- 第2節 『教育学』における「自由と強制とのアンチノミー」
- 第3節 『教育学』におけるアンチノミーに関連する先行研究
- 第4節 「道德化」にかんする従来解釈の問題
- 第5節 批判哲学における「教育論」の位置づけ
- 第6節 『教育学』と『宗教論』の接合解釈の妥当性と限界
- 第7節 「自由と強制とのアンチノミー」の解決の可能性
- 第8節 個人の教育にかんする「自由と強制とのアンチノミー」の解決
- 第9節 人類の教育にかんするアンチノミーとその解決

第4章 法における「自立と平等とのアンチノミー」

第1節 歴史哲学における「隠されたアンチノミー」

第2節 『理論と実践』における「自立」概念について

第3節 『理論と実践』における「自立と平等とのアンチノミー」

第4節 「自立と平等とのアンチノミー」に関連する先行研究

第5節 「成熟」概念に基づく「自立」概念の多義性

第6節 言論の自由による「自立と平等とのアンチノミー」の解決の可能性

第5章 宗教における「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」

第1節 『宗教論』における「隠されたアンチノミー」

第2節 「感性的図式」としての宗教共同体

第3節 「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」の定式化

第4節 「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」に関連する先行研究

第5節 「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」の解決の可能性

結論

注

参考文献一覧

凡例

- 一、カントの著作からの引用は、アカデミー版カント全集より、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で本文中に記す。ただし、『純粹理性批判 (*Kritik der reinen Vernunft*)』にかんしては、慣例により原著第一版と第二版をそれぞれ A と B で表記し、頁数をアラビア数字で表す。『レフレクシオン』については、アカデミー版編者エーリッヒ・アディッケスによる整理番号を脚註に記載する。
- 二、その他の著作・論文からの引用および参照は、その都度注に挙げる。
- 三、カントの著作およびその他の外国語文献の引用は、日本語訳のあるものについては適宜参照したが、基本的に筆者自身による訳文である。
- 四、引用文中の傍点は、原文のゲシュペルトに対応する。
- 五、引用文中の [] は、筆者による補足である。
- 六、巻末に参考文献一覧を付す。

初出一覧

- 第 1 章 「カント哲学における文化と自律-カントにおける文化批判の理論の可能性-」(法政哲学会編『法政哲学』第八号、2012 年、所収)。
- 第 2 章 「カントにおける Kultur 概念の環境倫理的解釈の試み」(日本カント協会編『日本カント研究 10』、2009 年、所収)。
- 第 3 章 「カント教育論における自由と開化のアンチノミー」(日本カント協会編『日本カント研究 12』2011 年、所収)。
「カント「教育論」における「道德化」の意味とその射程-「理性の開化」と「世界市民的教育」の関係-」(教育哲学会編『教育哲学研究』第 107 号、2013 年、所収)。
- 第 4 章 「カントの『理論と実践』における自立のアンチノミー」(『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年、所収)。
- 第 5 章 「カント『宗教論』における根本悪と社会哲学」(『法政大学大学院紀要』第 62 号、2009 年、所収)。
「カント『宗教論』における宗教と文化の関係について-「見えざる教会」と信仰の二重性」(『法政大学大学院紀要』第 65 号、2010 年、所収)。

序論

一 本研究の目的

本研究の目的は、次の四つの課題を解決することにある。第一に、近代ドイツの哲学者、イマヌエル・カントの批判期の思索のうちに「隠されたアンチノミー状態」が存在することを解明する。第二に、この状態に対するカントによる解決の取り組みと関連する研究史を吟味・検討し、批判哲学のなかで「隠されたアンチノミー」が生じる原因を明らかにする。第三に、このことによって「隠されたアンチノミー」の解決の可能性を提示する。第四に、この課題に取り組むカントの思索の両義的立場とともに、「文化と道徳とのアンチノミー」に関連する批判哲学の歴史的・今日的意義を解明する。

本研究で筆者が扱う「アンチノミー状態」とは、カント自身が明確に「アンチノミー」(Antinomie)と名づけることもなく、従来のカント研究史のなかでも見逃されてきた論点である。そこで本研究では、これらの「アンチノミー状態」を上記の二重の意味で「隠されたアンチノミー」と呼ぶ。

本研究では、上記の目的を実現するために、次の四点の主要課題を解明する。第一に、カントの批判哲学の中で、文化・開化(Kultur)と道徳(Moral)との関係がアンチノミー状態として存在している事実を明らかにする。第二に、この「隠されたアンチノミー」がカント哲学の体系のうちで重要な意義と役割を果たしている点を解明する。第三に、「隠されたアンチノミー」に対するカント自身の解決の試みを吟味・検討し、「隠されたアンチノミー」が生じる原因が、批判哲学のなかに存在する「道徳目的論的規定」と「人間学的規定」という二つの異なる立場の対立にあることを明らかにする。第四に、「隠されたアンチノミー」が「教育」「立法」「宗教」という三つの分野で文化と道徳のアンチノミー状態を形成している事実の意味とカントによる解決の方法の問題点を解明し、「隠されたアンチノミー」の解決の可能性と、こうした試みが持つ現代的意義を明らかにする。

本研究が解明しようとする「隠されたアンチノミー」とは、三批判書の各弁証論で示されているアンチノミーとは異なる。筆者の解釈によれば、カントは三批判書以外の文献で、特に実践的かつ経験的な事柄にかんする考察の場面で、これまで十分注目されなかったアンチノミー状態の解決に非明示的に取り組んでいた。そこで本研究は、上述の理由により、こうした三批判書の各弁証論以外で見出される「アンチノミー状態」を「隠されたアンチノミー」と名づける。

「隠されたアンチノミー」は、三批判書以外の著作にしばしば見出される。だが、『判断力批判』の方法論で展開された文化・開化と道徳との関係にかんする議論が、「隠されたアンチノミー」の原型的な理論を形成していると筆者は考える。カントは『判断力批判』の方法論のなかで、人類の技術的、社会的素質の進歩の過程である文化・開化を、人類の道徳的進歩のための準備であり、必須の段階として位置づける。同時にカントは、文化・開化が道徳性そのものを破壊しうる「輝かしき悲惨」(das glänzende Elend)として現れうることも強調する。カントのなかには、文化に対する二つの相対立する見方が存在する。ここに「文化と道徳とのアンチノミー」と呼ぶべき事態が現れているのである。

ところで、カントは「人類の運命」と題された『人間学のレフレクシオン』のなかで、人類が「[自分で考えることをしない] 子供としての未成熟」「[立法にかんして] 市民的な未成熟」「宗教的な未成熟」という三つの未成熟状態にあると述べ、そこからの改善のための方途として「教育(開化)、立法(文明化)、宗教(道徳)」(XV898)を挙げている。カントにとって、「教育」「立法」「宗教」という三つの分野は、人間の進歩を具体的に論ずるための場所であり、そのための方途であった。したがって「隠され

たアンチノミー」とは、カントが人間の未成熟状態から脱出する方途として考えていた三つのプロセスにおいて、人間理性が陥らざるをえない不可避のアンチノミー状態を意味する。

要約すれば、本研究の目的は、これらの三つの分野における「隠されたアンチノミー」の存在を解明し、それに対するカントの解決の試みを批判的に探究することによって、批判哲学の歴史的・今日的意義を明らかにすることである。

二 先行研究の現状と課題

「隠されたアンチノミー」の研究は、これまでカントの批判哲学の研究史では十分に顧みられることがなかった隠された課題である。筆者が見る限り、「隠されたアンチノミー」がこれまで明示的な問題として扱われなかった原因は三つある。

第一の原因は、カント自身のアンチノミー概念の把握の変化にある。R.ゴクレンウスをはじめとする諸々の概念史研究が明らかにしたように、カントは法学および聖書解釈学に由来するこの言葉を摂取しながら、独自の哲学的立場から、アンチノミー概念に新たな意味を与えていった。カントは三批判書それぞれの弁証論のなかで、アンチノミーを提示しているが、L.W.ベックが指摘したように、アンチノミーの性格は一貫したものではなく、各著作の中で変化している。そのなかで、本研究は、カントによるアンチノミー概念の性格づけの決定的な変化は『判断力批判』で生じていると解釈する。なぜならば、『純粹理性批判』のアンチノミーでは、二つの領域の思考上の両立可能性が課題であったのに対して、『判断力批判』の課題は、二つの領域の架橋にあるとされているからである。このことはつまり、アンチノミーの解決を通じて示される課題が、思考上の両立可能性から理論と実践の架橋という課題へと変化したことを意味し、アンチノミーの定式と解決自体に大きな変化が生じているからである。実際、カント自身、『判断力批判』では、アンチノミーの解決について「我々が果たすことができるのは、趣味の要求と反対要求との間のこの抗争を取り除くこと（zu heben）以上のことではない」（V341）と説明するように、『判断力批判』のアンチノミーは、解決（Auflösung）ではなく除去（Hebung）と呼んでいるのである。本研究の解釈によれば、アンチノミーの課題が理論と実践への架橋という課題へと変化するなかで、カントは多くの経験的、実践的な文脈でのアンチノミー状態に直面することになったのである。

第二の原因は、この架橋にかんする先行研究の解釈の相違に由来する。筆者が見るところ、先行研究の解釈は、『判断力批判』で展開された架橋の課題をどのように捉えるかということで、次の四つの立場に分けることができる。

第一の立場は、H.クレンメに代表され、この課題を『純粹理性批判』の第三アンチノミーの問題の再展開とみなす立場である。第二の立場は、カントの歴史哲学の基礎づけとして『判断力批判』を理解する K. デュージングや A. ウッドの解釈に代表され、この課題を歴史哲学と最高善に関する課題とみなす立場である。第三の立場は、M.ロルフや、P.ガイヤーによって代表され、この課題を「技術的－実践的（technisch－praktisch）」と「道徳的－実践的（moralisch－praktisch）」という二つの実践のレベルの架橋とみなす立場である。第四の立場は、第三の立場に接近しつつ、より包括的に「技術的－実践的」次元での開化と「道徳的－実践的」との関係捉えようとする R. ルーデンの研究に代表されるものである。

第三の原因は、『判断力批判』で展開されている文化の両義的性格をカント自身だけでなく、研究者も捉えられなかった点にある。カントにとって、「技術的－実践的」次元での文化は、たんに「道徳的－実践的」次元のための準備となるだけではない。H. シュネーデルバッハも指摘するように、カントにとっ

て文化とは、アンヴィヴァレントな性格を持つものであり、道徳と対立する性格を持つものなのである。

本研究は、先行研究が、カントによる文化概念の両義的な性格付けという特徴を逸していることを指摘し、この両義性に着目することで、「技術的一実践的」次元での文化と道徳との「隠されたアンチノミー」とその解決を明示的に取り出すことを試みる。

三 本研究の考察方法と構成

本研究の考察方法は、次の三点によって特徴づけられる。

第一に、本研究はカント哲学の内在的な研究を試みる。たしかに本研究が中心的に扱う主題は「隠されたアンチノミー」であり、カント自身が明示的にはアンチノミーとしなかった箇所である。だが、本研究は、最近の「インピュア・エシックス」(Impure Ethics) や A.ウッズのコミュニタリアンの解釈のように、批判哲学を応用倫理的な問題群へと直接に適用しようとするものではなく、『判断力批判』および関連テキストの内在的解釈として「隠されたアンチノミー」と呼ぶべき問題を抽出し、その解決を考察する。

第二に、本研究では、考察の範囲を『判断力批判』以降に公刊された著作、講義録および『レフレクシオン』に限定する。本研究は、従来の生成史や発展史的解釈のように、カントが次第にアンチノミー論を一つの独立した論として深化、拡大させていったという解釈を採用しない。むしろ、カントが、『判断力批判』以降、「教育」「立法」「宗教」での文化構築のプロセスについて論じるときに、「文化と道徳とのアンチノミー」の問題を展開していったと考える。

第三に、本研究では、各章で提示される「隠されたアンチノミー」を「文化と道徳とのアンチノミー」の変形として捉え、その都度、アンチノミーの形に定式化する。

本研究は五つの章から構成される。本研究では、第2章以降で「文化と道徳とのアンチノミー」と「隠されたアンチノミー」の構造を解明する。第1章では、そのための準備作業として、カントのアンチノミー論の研究史を吟味・検討し、その意義と課題を探求する。

第2章では、『判断力批判』の方法論で扱われている「文化と道徳とのアンチノミー」の意義と課題を考察する。カントは文化に対して、相対立する二つの立場から定義を与えており、その結果「文化と道徳とのアンチノミー」が現れていることを明らかにする。また、「文化と道徳とのアンチノミー」が、第3章以降に展開される「隠されたアンチノミー」の基本モデルであることを明らかにする。

第3章では、「教育」における「隠されたアンチノミー」を考察する。これは、カントの教育思想における「自由と強制とのアンチノミー」として定式することが可能である。また、カントは「個人の教育」と「人類の教育」という二つの観点から、教育を論じている。したがって、教育にかんする「隠されたアンチノミー」も、この二つの観点から考察可能であることを論証する。本研究は、教育にかんする「隠されたアンチノミー」の原因が、文化に対するカントの相対立する二つの立場にあることを明らかにする。さらに、これらの「隠されたアンチノミー」の解決の可能性が、「理性の開化」と「実験としての教育」という考え方に見出しうることを解明する。

第4章では、「法」における「隠されたアンチノミー」を考察する。これは、「自立と平等とのアンチノミー」として定式化することが可能である。第4章では、「自立と平等とのアンチノミー」の原因も、文化に対する相対立する二つの立場にあることを明らかにする。そして、この「自立と平等とのアンチノミー」の解決の可能性が、「言論の自由」の働きにあることを明らかにする。

第5章では、「宗教」における「隠されたアンチノミー」を考察する。これは、「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」として定式化することが可能である。第5章では、「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」の原因も、文化に対するカントの相対立する二つの立場にあることを明らかにする。そして、このアンチノミーの解決の可能性を解明する。

第1章 批判哲学におけるアンチノミー概念の再検討

第1章では、次章以降に論じる「隠されたアンチノミー」の諸相を解明するための準備作業として、基本モデルの実態を解明するために、カントのアンチノミー論の先行研究を考察する。本章では、同時にカントのアンチノミー概念の変化を明らかにする。さらに本章では、本研究の主題である「隠されたアンチノミー」が、カント哲学のうちでどのような意義を持っているかを明らかにする。

そのために、第1章では次の順序で論述を展開する。はじめに批判哲学におけるカント自身の「アンチノミー」の用法の変遷を探り、この概念の意味の多義性を示す(第1節)。第二に、『純粹理性批判』、『実践理性批判』のアンチノミー論の先行研究の状況を考察し、アンチノミーの定式と性質の変化を解明する(第2節)。第三に、『判断力批判』のなかでは、アンチノミーの性質が決定的に変化していることを明らかにする。このことによって、三批判書を経て、カントのアンチノミー概念の性質がどのように変化しているのかが解明されるだろう(第3節)。最後に、三批判書以外の文献にかんするアンチノミー状態に関連する先行研究を考察し、それらの成果と限界を指摘する(第4節)。

以上の考察により、カントのアンチノミー論の研究史および、従来のアンチノミー研究の成果と課題を吟味・検討した探究し、カントのアンチノミー概念が登場する場面が、純粋に理論的な問題からより具体的で実践的な問題へと変化し、その定式と内容についても変化が生じていることを解明する。その結果、三批判書の各弁証論以外にも、多数のアンチノミー状態が存在することを明らかにする。そうしたアンチノミー状態は、『判断力批判』の方法論で論述された「文化と道徳とのアンチノミー」として解釈することができる。なぜならば、無作為に様々な文脈で現れるように見える「隠されたアンチノミー」は、人間の文化的進歩と道徳的進歩の間で起こる矛盾・対立する事態であると捉えることができるからである。

第2章 文化と道徳とのアンチノミー

第2章では、『判断力批判』の論述にみられる「文化と道徳とのアンチノミー」が、批判哲学のなかの様々な位相で露わとなる「隠されたアンチノミー」の基本モデルとして解釈可能であることを明らかにする。この場合、「隠されたアンチノミー」の基本モデルとは、序論および第一章で明らかにしたように、「文化と道徳とのアンチノミー」が、後述の他の三組の「隠されたアンチノミー」の基礎となる性格と構造を有していることを意味する。

そのために、第2章では、次の順序で論述を行う。カントの文化概念にかんする近年の先行研究の成果を探究し、同時に先行研究による解釈の問題点を指摘する。先行研究の問題点とは、文化概念に対するカントの異なる二つの思考傾向を十分に説明できなかつたことにある。こうして本研究は、最近の研究史の成果を吟味・検討することによって、批判哲学のなかで錯綜した意味をもつ「開化・文化」概念の定式化と定義づけを試みる(第1・2節)。次に、カントが文化概念について自然目的論と道徳目的論という二つの異なる立場から論じており、自然目的論的な論理を退ける仕方で文化に対する両義的な評価を下していることを浮き彫りにする。従来の研究者の多くは、カントによる文化概念のこの両義的な評価を見逃してきた。その原因は、この両義的な評価の特に否定的評価が、カントの論述のなかでどのような論理に基づいて展開されているのかを従来の研究が十分把握できず、理解が不明瞭であったことに起因する(第3節)。そして、文化に対するカントの両義的な評価に基づいて、文化と道徳との間にアンチノミー状態が生じていることを明らかにする。筆者の解釈によれば、文化概念に対するカントの二つの

論述の立場が不明瞭であったが故に、この「文化と道德とのアンチノミー」は明確に定式化されず、「隠されたアンチノミー」状態となっていたのである（第4・5節）。

筆者が見るところ、『判断力批判』のなかで、カントは文化概念を二つの思考のベクトルから論じていると解釈可能である。すなわち、一方でカントは文化を自然から自由への「移行」（Übergang）のための媒介として位置づけている。なぜなら、カントは、この自然から自由への移行が必要な理由として、両者の間に見渡しがたい「裂け目」（Kluft）が存在するとみなし、文化をそのための準備ないし媒介とするからである。『判断力批判』の論述と文化概念は、自然の領域から自由の領域への「移行」のプロセスをさまざまな手続きによって説明しようとする試みである。その意味で、文化は人間を道徳的主体へと準備する積極的な意味をもつと捉えられる。他方で、カントは「自由の世界が自然の世界に対してある影響を及ぼすべきである」（V176）と強調する。この立場からすれば、二つの領域を統合する働きは、自由の側から果たされるべきであり、文化は、人間の諸々の自然的営みである限り、自由の領域からは常に批判の対象として捉えられることになる。

カントの批判哲学全体を俯瞰するならば、文化に対して、根本的にこの二重の立場が取られているのであり、この点に「文化と道德とのアンチノミー」が生まれる必然性があったのである。しかし筆者が見る限り、『判断力批判』は、自然から自由への移行という論理構造のもとで論述が展開されているために、前者の立場が強く正面に出ており、文化に対するカントの二重の立場と、この立場がもたらす「文化と道德とのアンチノミー」が隠されてしまった。従来の諸研究もまた、こうした移行の側面から『判断力批判』および文化概念を理解してきたため、『判断力批判』研究史のなかでも、このアンチノミーは「隠されたアンチノミー」の状態に留まり続けたのである。

以上の考察により、第2章では、『判断力批判』の方法論のなかで、文化と道德との関係がアンチノミー状態にあることを明らかにし、この関係が「文化と道德とのアンチノミー」として解釈可能であることを解明する。そして、このアンチノミーは、批判哲学のなかに潜む文化に対する「道徳目的論的規定」と「人間学的規定」という二つの異なる立場の対立に起因することを明らかにする。さらに「文化と道德とのアンチノミー」は、第3章以降に展開された「隠されたアンチノミー」の基本モデルであり、カントは「教育・立法・宗教」という三つの位相にかんする研究のなかでも、このアンチノミーに取り組んでいることを論証する。

第3章 教育における「自由と強制とのアンチノミー」

第3章では、「教育」にかんする「隠されたアンチノミー」を解明する。第3章の目的は、カントの『教育学』のなかに「文化と道德とのアンチノミー」を原型ないし基本モデルとする「隠されたアンチノミー」が存在することを明らかにし、このアンチノミーに対するカントの取り組みの実態と解決の可能性を考察することである。

第3章では、次の順序で論述を行う。まず、カントの教育思想における「隠されたアンチノミー」を「自由と強制とのアンチノミー」として取り出す。また、このアンチノミーが「文化と道德とのアンチノミー」に基づいていることを明らかにする（第2節）。第二に、このアンチノミーに関連する先行研究を考察し、先行研究に対する筆者の立場を示す。先行研究の多くは、このアンチノミーの根本的な原因と解決の可能性を説得的に示すことができなかった。しかし筆者の見解では、カントの教育思想のなかにこのアンチノミーの原因と解決を読み取ることは可能である（第3節）。第三に、先行研究が、『教育学』

のなかの「隠されたアンチノミー」を十分に展開できなかつた原因を解明する。その原因は、先行研究の多くは『教育学』における「道德化」という概念の解釈が不十分であったことにある。そこで本章では、先行研究の解釈を批判することによって、この不十分性を明らかにする（第4節～第6節）。第四に、カントの教育思想のなかから「自由と強制とのアンチノミー」の解決の可能性を明らかにする（第7節～第9節）。その際、カントの教育思想が「個人の教育」と「人類の教育」という二つの観点から構成されていることを解明し、それぞれの観点から、教育にかんするアンチノミーが導出可能であることを示す。同時に「個人の教育」にかんするアンチノミーと「人類の教育」にかんするアンチノミーとの解決の可能性を明らかにする。この「個人の教育」の観点からの解決とは、筆者の解釈によれば、教育の原理に「自分で考えること」を根本的な態度とする「理性の開化」という条件を据えることにある。他方、「人類の教育」の観点からの解決は、教育を実験的なものとみなすことにある。本章では、こうした二重の観点からの「自由と強制とのアンチノミー」に対する解決の可能性を考察することにより、カントの教育思想が持つ「世界市民主義的な教育」という理念もまた明らかにする。

以上の考察により、第3章では、教育における「隠されたアンチノミー」を、「個人の教育」および「人類の教育」という二つの観点から考察し、それぞれ「自由と強制とのアンチノミー」および「人類の教育の可能性にかんするアンチノミー」として定式可能であることを明らかにする。そして、「教育」における「隠されたアンチノミー」の原因が、文化に対するカントの相対立する二つの立場にあり、このアンチノミーの解決の可能性は、カントの教育思想における「理性の開化」と「実験としての教育」という考え方に見出すことが可能である。

第4章 法における「自立と平等とのアンチノミー」

第4章では、上述の第二の位相である「法」にかんする「隠されたアンチノミー」の存在を解明する。第4章で詳論するように、「法」にかんする「隠されたアンチノミー」は歴史哲学にかんする「隠されたアンチノミー」でもある。本章の目的は、カントの歴史哲学にかんする「隠されたアンチノミー」が存在することを明らかにし、このアンチノミーの実態と解決の可能性を解明することである。

以上の目的を遂行するために、第4章は次の順序で論述を進める。第一に、カントの歴史哲学における市民社会と法制度の発展の意義を考察する。それによって、カントの歴史哲学にかんする「隠されたアンチノミー」が「自立と平等とのアンチノミー」として定式可能であることを論証する。筆者の解釈によれば、この「自立と平等とのアンチノミー」は、歴史の過程における法制度の発展と人類の進歩にかんするアンチノミーを意味する。また、このアンチノミーの原因は、文化に対する「道德目的論的規定」と「人間学的規定」という二つの見方の対立にあり、したがって「自立と平等とのアンチノミー」もまた、「文化と道德とのアンチノミー」を基本モデルとした「隠されたアンチノミー」であることを明らかにする（第2節～第3節）。第二に、「自立と平等とのアンチノミー」に関連する従来の先行研究を詳細に吟味・検討し、それによって先行研究に対する筆者独自の見解を提示する。この課題に関連するいくつかの先行研究は、『理論では正しくとも実践には役に立たないという通説について』（以下、『理論と実践』と略記）の論述に「自立」概念の矛盾を指摘し、その矛盾を解決しようと試みてきた。しかし筆者の見解では、「自立」概念の矛盾は、この概念にかんするカント自身のある混乱に基づいている。そこで筆者は、この混乱の原因が、カントによる「成熟」概念の定義に起因していることを明らかにする（第4節～第5節）。第三に、「言論の自由」の概念が、「自立と平等とのアンチノミー」の解決の手がか

りを提示していることを論証する。筆者の解釈によれば、「言論の自由」は、「自立」の有無にかかわらず、あらゆる人が持つ自由である。しかも「言論の自由」は、法の改善と社会的な不平等の改善を実現する原理である。したがって「言論の自由」が法の改善の根拠として機能する場合には、「自立と平等とのアンチノミー」の解決の可能性が開かれるのである（第6節）。

以上の考察により、第4章では、「法」における「隠されたアンチノミー」が「自立と平等とのアンチノミー」として定式可能であることを明らかにする。このアンチノミーは、法制度の発展によって平等が促進されるとみなす立場と、法制度の発展によって平等が侵害されるとみなす立場との矛盾・対立である。そして本研究は、「自立と平等とのアンチノミー」の原因も、文化に対するカントの相対立する二つの立場にあり、このアンチノミーの解決の可能性は、カントの歴史哲学における「言論の自由」の働きの見出しうることを解明する。

第5章 宗教における「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」

第5章では、「宗教」にかんする「隠されたアンチノミー」の所在を解明し、このアンチノミーに対するカントの取り組みの実態と解決の可能性を考察する。本章では、宗教共同体にかんするカントの相対立する見解を明らかにし、「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」としてこの対立を定式化する。また本章では、このアンチノミーの原因と解決の可能性を解明する。筆者の解釈によれば、このアンチノミーの原因もまた、文化に対する「道徳目的論的規定」と「人間学的規定」という二つの見方の対立にある。本章では、さらに宗教共同体に対してカントが与えた制約を手がかりにして、このアンチノミーの解決の可能性を探究する。

以上の目的を遂行するために、第5章は次の順序で論述を進める。第一に、『宗教論』第三編を中心に、宗教共同体にかんするカントの論述を検討する。また、『宗教論』にかんする「隠されたアンチノミー」を「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」として定式化する（第2節～第3節）。筆者の解釈では、カントは一方で、不可視的教会の感性的図式として宗教共同体の必要性を主張する。しかし他方で、カントは、宗教共同体が倫理的共同体にとって本質的に不要であるとみなしている。このような二つの評価は、不可避免的にアンチノミー状態に陥ることになる。第二に、「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」に関連する先行研究を詳細に吟味・検討し、それによって、先行研究に対する筆者自身の独自の立場を提示する（第4節）。関連するいくつかの先行研究では、『宗教論』のなかにアンチノミー状態が存在することを指摘し、その解決を試みている。先行研究によるこうした指摘は、本章が取り扱う「隠されたアンチノミー」と重なる問題系である。だが、先行研究の多くは、このアンチノミーの根本的な原因と解決の可能性を説得的に示すことができなかった。先行研究の不首尾の原因は、もっぱら「道徳目的論的規定」か「人間学的規定」のいずれかの立場に依拠し、宗教共同体の持つ二重の性格を見落としてきたことにある。だが、筆者は、宗教共同体には「道徳目的論的規定」と「人間学的規定」という対立する二重の性格があることを認めることによって、カントの宗教論の固有性を明らかにすることができると考えている。第三に、「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」の解決の可能性を『宗教論』の論述から明らかにする（第5節）。このアンチノミーもまた、他の「隠されたアンチノミー」と同様に、現象界と叡智界の区別や概念の意味の相違を明らかにすることによって解決できず、このアンチノミーの解決は、歴史的实践のなかに求められている。しかし筆者の解釈によれば、「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」は、他の隠されたアンチノミーとは異なり、歴史のなかで実際に解決

されることはない。むしろ、このアンチノミーの解決の可能性は、宗教共同体が倫理的共同体へと移行しようとする過程で、宗教共同体が持つ歴史的なものを常に純粹宗教信仰へと接近させようとする「戦い (Kampf)」の継続の営みのうちに見出すことができる。

以上の考察により、第5章では、「宗教」における「隠されたアンチノミー」が「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」として定式可能であることを明らかにする。このアンチノミーは、宗教共同体が人間の道徳的進歩のために必要であるとみなす立場と、宗教共同体は人間の道徳的進歩のためには不要であり、むしろ道徳性を破壊するものであるとみなす立場との矛盾・対立である。また、このアンチノミーの解決の可能性は、他の「隠されたアンチノミー」とは異なり、実際の歴史では解決されない。なぜならば、「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」の解決の可能性は、歴史のなかで、宗教共同体が倫理的共同体へと接近しようとする継続的な「戦い」のなかにもみ考えうるからである。

結論

本研究は結論として、最初に提起した四つの課題を解決した。

第一に、カントの批判哲学のなかで、「文化と道徳とのアンチノミー」を基本モデルとした「隠されたアンチノミー」が、「教育」「立法」「宗教」という三つの分野で形成されていることを解明した。第二に、本研究は、批判哲学のなかに「道徳目的論的規定」と「人間学的規定」という、二つの異なる方向性から文化を論じる立場が存在することを明らかにし、「隠されたアンチノミー」がこれら両立場の対立に起因することを明らかにした。第三に、「教育」「立法」「宗教」の三分野で形成される「隠されたアンチノミー」の存在と解決の可能性を提示した。第四に、「隠されたアンチノミー」に取り組むカントの思索の両義的立場とともに、「文化と道徳とのアンチノミー」に関連する批判哲学の歴史的意義を解明した。

本論の結論を要約すれば、本研究は、上記の三分野における「隠されたアンチノミー」とその解決の可能性を吟味・検討することにより、批判哲学の今日的意義の一端を解明した。なぜなら、「隠されたアンチノミー」とは、カントの批判哲学の内部でのみ生じ、完結する課題ではないからである。「隠されたアンチノミー」の原因とは、理性が文化に対してとる「道徳目的論的規定」と「人間学的規定」という二つの異なる立場の対立にある。したがって人間が理性的思考を行なう限り、カントの時代に限らず、どの時代でも「文化と道徳とのアンチノミー」に陥り、その都度様々な位相の「隠されたアンチノミー」に直面することになる。このことは、カントの表現を用いれば、人間理性の不可避の運命である。

また、本研究が明らかにした「隠されたアンチノミー」の原因とそれに対する解決の取り組みに対する歴史的意義は、同時に批判哲学の今日的意義を示している。「隠されたアンチノミー」の解決の可能性として明らかにされた諸概念は、いずれも公開的原理として機能するという共通点を持っている。

教育にかんする「隠されたアンチノミー」の解決として明らかにした「理性の開化」および「実験としての教育」は、子どもおよび他者からの自由な批判を認める点で教育に公開的な性質を与える。法にかんする「隠されたアンチノミー」の解決として明らかにした「言論の自由」は、自由な言論を市民社会の基礎とする点で、法制度の発展の原理に公開的な性質を与える。そして、宗教にかんする「隠されたアンチノミー」の解決として明らかにした「倫理的共同体へと接近し続けるための戦い」は、宗教共同体を常に非完結的なものであるとみなす点で、倫理的共同体を目指す宗教に公開的な性質を与えるのである。カントは、政治制度の進歩の原理として「公開性」(Publizität)の重要性に着目し、それを抵抗権の代わりに据えていた。「他のひとびとの権利に関係するすべての行為のうちで、その格率が公開性と調和しないものは不正である」(VII 381)。したがって、「教育」「立法」「宗教」における公開的原理として機能する諸概念は、カントのこのような「公開性」(Publizität)の概念と類比的な意味で、「教育」「立法」「宗教」におけるアンチノミーを解決し続ける原理としての働きを有していると言える。

本研究は結論として、批判哲学における「隠されたアンチノミー」とその解決の取り組みが、哲学的な文化批判の営みとして今日でも意義を有することを明らかにした。なぜなら、「隠されたアンチノミー」とは、文化の進歩と道徳性の完成に向けた人間の営みが継続される限り、人間理性の不可避の運命であり、このアンチノミーの解決に向けて公開的かつ批判的に探究することが人間理性の永続的な課題であり、使命であると筆者は考えるからである。

注
(省略)

参考文献一覧

一次文献

(1) イマヌエル・カントの著作

- Kant, Immanuel : *Kants gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin 1900ff.
- *Kritik der Urteilskraft*, mit einer Bibliographie. von Heiner F. Klemme, Hamburg, Meiner, 2001.
- *Erste Einleitung in die Kritik der Urteilskraft*, hrsg. von Gerhald Lehmann. —2. Aufl. — Hamburg, Meiner, 1970.
- *Immanuel Kants Werke*, hrsg. von Ernst Cassirer, Band VIII, verlegt bei Bruno Cassirer, Berlin, 1923.
- *Die philosophischen Hauptvorlesungen Immanuel Kants, nach den neu aufgefundenen Kollegheften des Grafen Heinrich zu Dohna-Wundlacken*. hrsg. von Arnold Kowalewski, Rösl & Cie, München, 1924.
- *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, hrsg. von Karl Vorländer, Meiner, 1922.
- *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, hrsg. von Bettina Stangneth, Meiner, 2003.

(2) その他の著作

- Hamann, Johann Georg: *Briefwechsel, Band 5*, hrsg. von Walther Zieseemar und Arthur. Henkel, Insel-Verlag Frankfurt am Main, 1965.
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich: *Wissenschaft der Logik, ERSTER TEIL, DIE OBJEKTIVE LOGIK, Erster BAND, DIE LEHRE VON SEIN*, in: *GEORG WILHELM FRIEDLICH HEGEL, GESAMMELTE WERKE, Bd.21*. Hrsg. von der Rheinisch – Westfälische Alademie der Wissenschaften, Hamburg, Meiner, 1985.
- *Enzyklopädie der Philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*. in: *GEORG WILHELM FRIEDLICH HEGEL, GESAMMELTE WERKE, Bd.19*. Hrsg. von der Rheinisch – Westfälische Alademie der Wissenschaften, Hamburg, Meiner, 1989.
- Mendelssohn, Moses: *Über die Frage : Was Heißt Aufklären?* In: *Moses Mendelssohn, Gesammelte Schriften*, Bad Canstatt, Stuttgart, Bd.6/1. 1981, S. 113-119.
- Schiller, Friedrich: *Briefwechsel Schillers Briefe 1.3.1790 – 17.5.1794*. . in: *Schillers' Werke, Bd.26*. Hrsg. von Edith Nahler und Horst Nahler. Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar, 1992.

二次文献

(1) 外国語文献

- Alison, Henry E. : *Kant's Theory of Freedom*, Cambridge University Press, 1990.
- *Kant's Theory of Taste -A Reading of the Critique of Aesthetic Judgment*, Cambridge University Press, 2001.
- Auxter, Thomas: *Kant's Moral Teleology*, Mercer University Press, 1982.
- Barth, Karl : *Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert*, Evangelischer Verlag, 1947.
- *Protestant Thought : From Rousseau to Ritschl*, (trans. Brian Cozens) Harper & Brothers, 1959.
- Bartuschat, Wolfgang: *Zum systematischen Ort von Kants Kritik der Urteilskraft*, Vittorio Klostermann, 1972.
- Beck, Gunnar: Autonomy, History and Political Freedom in Kant's Political Philosophy, in: *History of European Ideas*, vol. 25, Taylor & Francis, 1999, pp. 217-241.
- Beck, Lewis W.: *A Commentary on Kant's Critique of Practical Reason*, The University of Chicago Press, 1960. (『カント『実践理性批判』の注解』藤田昇吾訳、新地書房、1985年)。
- Bennner, Dietrich / Göstemeyer, Karl F. : Postmoderne Pädagogik. Analyse oder Affirmation eines gesellschaftlichen Wandels? In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 33. 1987, S. 61-82.
- Bernstein, Richard J.: *Radical Evil. A Philosophical Interrogation*, Blackwell Publishers Ltd, 2002. (『根源悪の系譜』阿部ふく子訳、法政大学出版局、2013年)。
- Bojanowski, Jochen: *Kants Theorie der Freiheit, Rekonstruktion und Rehabilitierung*, Walter de Gruyter, 2006.
- Bobko, Aleksander: The Relationship between Ethics and religion in Kant's Philosophy, in: *Recht und Frieden in der Philosophie Kants, Akten des X. Internationalen Kant-Kongresses*. Herausgegeben von Valerio Louden, Ricardo R. Terra und Guido A. de Almeida und Margrit Ruffing, Walter de Gruyter, 2008, S.53-62.
- Bohatec, Josef: *Die Religionsphilosophie Kants in der "Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft": Mit besonderer Berücksichtigung ihrer theologisch-dogmatischen Quellen*, Hoffman und Campe, 1938. Nachdruck, Georg Olms. 1996.
- Bollnow, Otto F.: Kant und Pädagogik, in: *Westermanns Pädagogische Beiträge*, Braunschweig, 1954, S. 49-55.
- Brandt, Reinhard : "Das Erlaubnisgesetz, oder: Vernunft und Geschichte in Kants Rechtslehre", in: *Rechtsphilosophie der Aufklärung: Symposium Wolfenbüttel 1981*, Walter de Gruyter, 1982, S. 233-285.
- The Deduction in the Critique of Judgement: Comments on Hampshire and Horstmann, in: *Kant's Transcendental Deduction. The Three 'Critiques' and the 'Opus postumum'*, Stanford University Press, 1989, pp. 177-190.
- Cagle, Randy: Becoming a Virtuous Agent: Kant and the Cultivation of Feelings and Emotions, in *Kant-Studien* 96, Walter de Gruyter, 2005, 452-467.
- Cassirer, Ernst: *Kants Leben und Lehre*, Verlag von Bruno Cassirer, 1977. (『カントの生涯と学説』

門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修、みすず書房、1986年)。

- Caswell, Matthew: Kant's conception of the Highest Good, the Gesinnung, and the Theory of Radical Evil, in: *Kant-Studien* 97, Walter de Gruyter, 2006, S. 184-209.
- Cavallar, Georg: Sphären und Grenzen der Freiheit: Dimensionen des Politischen in der Pedagogik, in: *Kant – Pedagogik und Politik*, Ergon, 2005, S. 61-79.
- Despland, Michael: *Kant on History and Religion*, McGill-University Press, 1973.
- D'entrèves, Alexander Passerin: *Natural Law*, Hutchison House, 1952. (『自然法』久保正幡訳、岩波書店、1952年)
- Delekat, Friedrich: *Immanuel Kant. Historisch - kritische Interpretation der Hauptschriften*. Quelle & Meyer, 1969.
- Deligiorgi, Katerina: *Kant and the Culture of Enlightenment*. State University of New York Press, 2005.
- Düsing, Klaus: Das Problem des Höchsten Gutes in Kants Praktischer Philosophie, in: *Kant-Studien* 62, Walter de Gruyter, 1971, S. 5-42.
- *Die Teleologie in Kants Weltbegriff*, *Kants-Studien Ergänzungshefte* 96, Bouvier, 1986.
- Dustdar, Farah: Kant und die politische Kultur der Berliner Aufklärung, in: *Kant und die Berliner Aufklärung: Akten des IX. Internationalen Kant-Kongresses*. Hrsg. von Volker Gerhardt, Rolf-Peter Horstmann und Ralph Schumacher. Walter de Gruyter, 2001, S. 156-165.
- Erdmann, Benno: Die Entwicklungsperioden von Kants theoretischer Philosophie, in: *Reflexionen Kants zur kritischen Philosophie Bd. II. Reflexionen Kants zur Kritik der reinen Vernunft*, hrsg. von B. Erdmann, 1884. S. XII-LX.
- Eterovic, Igor: Biological Roots of Kant's Concept of Culture, in: *Kant und Die Philosophie in Weltbürgerlicher Absicht. Akten des XI. Kant-Kongresses 2010*, Walter de Gruyter, 2013, pp. 389-402.
- Formosa, Paul: From Discipline to Autonomy Kant's Theory of Moral Development, in: *Kant and Education - Interpretations and Commentary -*, Klas Roth and Chris.W. Surprenant(eds.), Routledge, 2012, pp. 163-176.
- Goclenius, Rudolphus: *Lexicon. philosophicum quo tanquam clave philosophiae fores aperiuntur* (1613), Georg Olms, 1980.
- Gonzalez, Ana M.: Kant's Contribution to social theory, in: *Kant-Studien*, Bd.100, Walter de Gruyter, 2009, S. 77-105.
- *Culture as Mediation, Kant on Nature, Culture, and Morality*. Georg Olms, 2011.
- Guyer, Paul: *Kant and the Experience of Freedom: Essays on Aesthetics and Ethics*, Cambridge University Press, 1993.
- *Kant and the Claims of Taste*, Cambridge University Press, 1997.
- Heimsöth, Heinz: *Transzendente Dialektik. Ein Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft. teil. 2, Vierfache Vernunftautonomie; Natur und Freiheit: Intelligibler und empirischer Charakter*, Walter de Gruyter, 1967.

- Heinz, Marion: Kants Kulturtheorie, in: *Philosophie nach Kant, Neue Wege zum Verständnis von Kants Transzendental – und Moralphilosophie*. Walter de Gruyter, 2014, S. 313-328.
- Henke, Roland W.: Kants Konzept von moralischer Erziehung im Brennpunkt gegenwärtiger Diskussion, in: *Pädagogische Rundschau* 51. Jahrgang, Peter Lang GmbH, Europäischer Verlag der Wissenschaften, 1997, S. 17-30.
- Hermann, Horst: Kant als Erzieher, in: *Kant und die Berliner Aufklärung: Akten des IX. Internationalen Kant-Kongresses*. Hrsg. von Volker Gerhardt, Rolf-Peter Horstmann und Ralph Schumacher. Walter de Gruyter, 2001, S. 39-46.
- Hinske, Norbert: Kants Begriff der Antinomie und die Etappen seiner Ausarbeitung, in: *Kant-Studien* 56, Walter de Gruyter, 1965, S. 485-496.
- *Kant als Herausforderung an die Gegenwart*, Karl Alber, 1980. (『現代に挑むカント』石川文康他訳、晃洋書房、1986年)。
- Horstmann, Rolf-Peter: Why Must There Be a Transcendentale Deduction in *Kant's Critique of Judgement?*, in: *Kant's Transcendental Deduction. The Three 'Critiques' and the 'Opus postumum'*, Stanford University Press, 1989, pp. 157-176.
- Die Idee der systematischen Einheit. Der Anhang zur transcendentalen Dialektik in Kants Kritik der reinen Vernunft, in: *Bausteine kritischer Philosophie*, Philo Verlagsgesellschaft, 1997, S. 109-130.
- Höffe, Otfried: *IMMANUEL KANT*, C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1983. (『イマヌエル・カント』藪木栄夫訳、法政大学出版局、1991年)。
- Kaulbach, Friedlich: Welchen Nutzen gibt Kant der Geschichtsphilosophie? in: *Kants-Studien* 66. Walter de Gruyter, 1975, S. 65-84.
- Kemal, Salim: *Kant and Fine Art: An Essay on Kant and the Philosophy of Fine Art and Culture*. Clarendon Press. 1986.
- Kersting, Wolfgang: *Wohlgeordnete Freiheit, Immanuel Kants Rechts - und Staatsphilosophie*, Mentis, 1984. (『自由の秩序』舟場保之・寺田俊郎監訳、ミネルヴァ書房、2013年)。
- Klemme, Heiner: “Einleitung”, in: *Kritik der Urteilskraft*. Meiner. 2001.
- “Einleitung”, in: *Über den Gemeinspruch, Zum ewigen Frieden. Philosophische Bibliothek Band 443*, Meiner, 1992.
- Konkoly, Damian G. Historical Progress and Moral Psychology in Kant, in: *Kant und die Berliner Aufklärung: Akten des IX. Internationalen Kant-Kongresses*. Hrsg. von Volker Gerhardt, Rolf-Peter Horstmann und Ralph Schumacher. Walter de Gruyter, 2001, S. 19-27.
- Krämling, Gerhard: *Die systembildende Rolle von Ästhetik und Kulturphilosophie bei Kant*, (Reihe praktische Philosophie Bd. 23), Alber, 1985.
- Kristjánsson, Kristjan: *Aristotle, Emotions, and Education*, Ashgate, 2007.
- Kuehn, Manfred: *Kant : A Biography*. Cambridge University Press. 2001.
- Lassman, Peter: Enlightenment, Cultural Crisis, and Politics: The Role of the Intellectuals from Kant to Habermas, in: *The European Legacy* vol. 5, Taylor & Francis, 2000, pp. 815-828.

- Lehmann, Gerhard: Das philosophische Grundproblem in Kants Nachlaßwerk, in: *Beiträge zur Geschichte und Interpretation der Philosophie Kants*, Walter de Gruyter, 1969, S.57-70.
- Lloyd, Genevieve: *The Man of Reason : "male" and "female" in Western Philosophy*, University of Minnesota Press, 1981.
- Louden, Robert: *Kant's Impure Ethics: From Rational Beings to Human Beings*. Oxford University Press, 2000.
- Løvlie, Lars: Kant's Invitation to Educational Thinking, in : *Kant and Education - Interpretations and Commentary* , Klas Roth and Chris.W. Surpenant(eds.), Routledge, 2012, pp.163-176.
- Makreer, Rudolf A.: Traditional Historicism, Contemporary Interpretations of Historicity, and the History of Philosophy, in: *New Literary History*, vol.21, No.4, The Johns Hopkins University Press, 1990, pp. 977-991.
- Mark, Packer: The highest good in Kant's Psychology of Motivation, in: *Idealistic Studies* 13, Philosophy Documentation Center, 1983, pp. 110-119.
- Maus, Ingeborg: *Zur Aufklärung der Demokratietheorie*, Suhrkamp, 1992.
- Munzel, G. Felicitas: "Menschenfreundschaft: Friendship and Pedagogy in Kant, in: *Eighteenth – Century Studies*, vol.32, No.2, The Johns Hopkins University Press, 1998, pp. 247-259.
— *Kant's Conception of Pedagogy. Toward Education for Freedom*, Northwestern University Press, 2012
- Merle, Jean-Christophe: Envy and Interpersonal Dependence in Kant's Conception of Economic Justice, in: *Kant und die Philosophie in Weltbürgerlicher Absicht, Akten des XI. Kant-Kongresses* 2010, Walter de Gruyter, 2013, S. 765-776.
- Metzger, Wilhelm: *Gesellschaft, Recht und Staat in der Ethik des deutschen Idealismus*, Scientia Verlag, 1966.
- Natorp, Paul: "Einleitung" in: *Kant's gesammelte Schriften, Band IX*. Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, 1923.
- Overhoff, Jürgen: Immanuel Kant, die philanthropische Pädagogik und die Erziehung zur religiösen Toleranz, in: *Immanuel Kant und die Berliner Aufklärung*, Reichert Verlag, 2000, S. 133-147.
- Pateman, Carole: *The Sexual Contract*, Stanford University Press, 1988.
- Pauen, Michael: Zur Rolle des Individuums in Kants Geschichtsphilosophie, in: *Kant und die Berliner Aufklärung: Akten des IX. Internationalen Kant-Kongresses*. Hrsg. von Volker Gerhardt, Rolf-Peter Horstmann und Ralph Schumacher. Walter de Gruyter, 2001, S. 35-43.
- Paulsen, Friedrich: *IMMANUEL KANT sein leben und seine lehre*, Frommans Verlag, 1920.
- Reich, Klaus: Rousseau und Kant, in: *Klaus Reich. Gesammelte Schriften*. Meiner, 2001, S. 173-188.
- Ritzel, Wolfgang: Wie ist Pädagogik als Wissenschaft möglich? In: *Kant und die Pädagogik: Pädagogik und Praktische Philosophie*. Königshausen & Neumann, 1985, S. 37-45.
- Riedel, Manfred: Herrschaft und Gesellschaft. Zum Legitimationsproblem des Polischen in der Philosophie, in: *Materialien zu Kants Rechtsphilosophie*, Suhrkamp, 1976. (「支配と社会—哲学における政治の正当化問題に寄せて」佐々木毅訳、『伝統社会と近代国家』所収、岩波書店)。

- Rohlf, Michael: The Transition from Nature to Freedom in Kant's Third Critique, in: *Kant-Studien* 99, Walter de Gruyter, 2008, S. 339-360.
- Ross, Willam David: *Kant's Ethical Theory*, Oxford University Press, 1954.
- Sherman, Nancy :Reasons and Feelings in Kantian Morality, in: *Philosophy and Phenomenological Research*, vol.55, No.2. 1995, pp. 369-377.
- Schnädelbach, Herbert: Kultur und Kulturkritik, in: *Zur Rehabilitierung des animal rationale. Vorträge und Abhandlungen 2*, Suhrkamp, 1992, S. 158-184.
- Schwartländer, Johannes: *Der Mensch ist Person. Kants Lehre von Menschen*. Kohlhammer, 1968.
(『カントの人間論—人間は人格である』佐竹昭臣訳、成文堂、1986年)。
- Schweitzer, Albert: *Die Religionsphilosophie Kants: von der kritik der reinen Vernunft bis zur Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, Geolg Olms, 1974. (アルベルト・シュヴァイツァー『カントの宗教哲学』シュヴァイツァー著作集、第15巻)。
- Silber, John R.: The Ethical Significance of Kant's Religion, in *Immanuel Kant, Religion Within the Limits of Reason Alone*. Haper & Row, 1960, pp. lxxix-cxxxvii.
- The Importance of the Highest good in Kant's Ethics, in: *Ethics 73*, The University of Chicago Press. 1963, pp. 179-197.
- Spämann, Robert: Autonomie, Mündigkeit, Emanzipation zur Ideologisierung von Rechtsbegriff, in: *Erziehungswissenschaft, Zwischen Herkunft und Zukunft der Gesellschaft*, hrsg. von Siegfried Oppolzer, 1971, S. 317-324.
- Surprenant, Chris W. : Kant's Contribution to moral education: the relevance of catechistics, in: *Journal of Moral Education*. Vol 39, No.2, Routledge, 2010.
- Tonelli, Giorgio : Das Wiederaufleben der deutsch-aristotelischen Terminologie bei Kant während der Entstehung der "Kritik der reinen Vernunft", in: *Archiv für Begriffsgeschichte. Band 9*. Meiner, 1964, S. 233-242.
- Troeltsch, Ernst: Das Historische in Kants Religionsphilosophie, in *Kant-Studien IX*, Walter de Gruyter, 1904, S. 21-154.
- Weisskopf, Traugott: *Immanuel Kant und die Pädagogik*, EVZ Verlag Abt, 1970.
- Wilson, Holly L: *Kant's Pragmatic Anthropology, It's origin, Meaning, and Critical Significance*, SUNY, 2006.
- Wilson, Jeffrey: Teleology and Moral Action in Kant's Philosophy of Culture, in: *Recht und Frieden in der Philosophie Kants, Akten des X. Internationalen Kant-Kongresses*. Herausgegeben von Valerio Louden, Ricardo R. Terra und Guido A. de Almeida und Margrit Ruffing, Walter de Gryuter, 2008, S.765-776.
- Winkels, Theo: *Kant Forderung nach Konstitution einer Erziehungswissenschaft*, Profil, 1984.
- Wolterstoff, Nicholas P.: Conundrums in Kant's Rational Religion, in: *Kant's Philosophy of Religion Reconsidered*, eds. Phillip J. Rossi and Michael Wreen, Indiana University Press, 1991, pp. 40-53.
- Willaschek, Marcus: *Praktische Vernunft, Handlungstheorie und Moralbegründung bei Kant*, J.B. Metzler, 1992.

- Wood, Allen W.: *Kant's Moral Religion*, Cornell University Press, 1970.
- Kant's Philosophy of History. in: *Toward Perpetual Peace and Other Writings on Politics, Peace, and History*. Yale University Press. 2006, pp. 243-262.
- Rational Theology, Moral Faith, and Religion, in: *the Cambridge Companion to Kant*, Cambridge University Press, 1992, pp. 394-416.
- Kant and the Problem of Human Nature, in: *Essays on Kant's Anthropology*. Cambridge University Press, 2003, pp. 38-59.
- Wundt, Wilhelm: *Völkerpsychologie : eine Untersuchung der Entwicklungsgesetze von Sprache, Mythos und Sitte*. Bd.10, Alfred Kröner, 1920.
- Yovel, Yihimiah: *Kant and the Philosophy of History*, Princeton University Press, 1980.

(2) 邦語文献

- 宇都宮芳明『カントの啓蒙精神』岩波書店、2006年。
- 小倉志祥『カントの倫理思想』、東京大学出版局、1972年。
- 小野原雅夫「自由への教育—カント教育論のアポリアー」、『別冊情況』、2004年、212頁～222頁。
- 「規定的判断力の自由」『現代カント研究 11 判断力の問題圏』、晃洋書房、2009年、1～20頁。
- 隈元泰弘「カントの教育思想とその現代的意義—批判哲学における教育論の方法論的基礎付けとその再構築の試論—」、『梅花女子大学文学部紀要 33』梅花女子大学文学部、1999年、1～22頁。
- 鈴木晶子、『イマヌエル・カントの葬列』、2006年、春秋社。
- 高田純「カントの教育学講義—「自然素質の調和的発達」をめぐって」、『文化と言語』第六十七号、2007年、181～241頁。
- 谷田信一「カントの教育学的考察—その背景・内容・意義—」、『社会哲学の領野』、晃洋書房、1994年、135～164頁。
- 寺田俊郎「カントの道徳教育論の現代的意義」、『哲学科紀要』第三十七号、2011年、1～36頁。
- 浜野喬士『カント「判断力批判」研究』、作品社、2014年。
- 藤井基貴「一八世紀ドイツ教育思想におけるカント『教育学』の位置付け」、『日本カント研究七』、理想社、2006年、153～168頁。
- 保呂篤彦「根本悪の克服—個人における、また人類における—」、『日本カント研究 9』、理想社、2009年、31頁～32頁。
- 牧野英二『遠近法主義の哲学』、弘文堂、1996年。
- 『「持続可能性の哲学」への道』、法政大学出版局、2013年。
- 山口匡「カントにおける教育学の構想とその方法論的基礎—理論＝実践問題と《judiziös》な教育学—」、『教育哲学研究』第七十一号、1995年、73頁～86頁。
- 山名淳「カントの啓蒙意識に見る「導く」ことの問題—カントの「成人性 (Mündigkeit)」をめぐって—」、『教育哲学研究 59』、教育哲学会編、1989年、88～101頁。